
無能な僕と偽装な彼女

水瀬律那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能な僕と偽装な彼女

【Nコード】

N5251B

【作者名】

水瀬律那

【あらすじ】

無能な僕は、彼女を守ってやることさえできなかった。それ故、彼女は偽装する道を選んだのだ。僕に、心配をかけないように。何故？僕は、もっと頼ってほしいのに。思いは、届く事知らず。無能な僕と、偽装な彼女の物語。

1 僕と彼女

「悲しいんだ」

もう、夕陽は落ち始めていた。

暗い部屋に、二人の人間。

一人は僕。もう一人は、彼女。

「君は、全てを綺麗事にしようとしている」

僕は机に片手をつけて、窓の外を見詰めた。

山の後ろに夕陽が少し見える。空も雲も赤く染まっている。

それは、部屋の空気を、より一層虚しくさせた。

「なんで?・・・なんで、僕を頼ってくれないのさ?」

窓の外を見詰めながら喋る。

雲は風に身を任せ、ゆったりと動いていた。

ゆっくりとした動作で、僕は振り返り

彼女の方を見た。

手を後ろにやり、机に両手をつき彼女を見詰める。

彼女は、ただ静かに立っていた。

何の表情も読み取れない顔は、とても綺麗だった。

「・・・なんで、嘘を吐くの?」

涙が出そうになった。

でも、こんなところで泣いたらかっこ悪い。

僕は涙をぐつと堪えた。

彼女は少し俯き加減の顔を上げ、僕を見た。

そして、にっこりと笑った。

その笑顔は優しげで、とても美しかった。

「・・・何の話・・・?」

彼女が、言葉を発する。

細まれた目が、僕を優しく見詰めた。

そして、その綺麗な声は、僕の感情を揺るがす。

「・・・それが、僕の心を痛め付けるんだ」
涙が零れてきそうので、少し俯く。

「それって、何・・・？」

彼女は優しい声で、笑顔のまま言った。
唇を噛み締める。

まだ、涙は零れてはいけない。

もう少し。もう少し、我慢するんだ。

僕は心の中で自分に言い聞かせてから
顔を上げ、彼女を見詰めた。

彼女の瞳からは、何の感情も読み取れなかった。

「その・・・その、嘘の笑顔が僕を痛めつけるんだ・・・!!」

僕の声は、震えていたかもしれぬ。

彼女は、笑顔のままだった。

僕が彼女を初めて見たのは、中学一年生の入学式だった。
彼女は、女子達の中でも一際目立っていた。

整った綺麗な顔と、美しいロングヘアを持ち合わせた

彼女は、完璧と言っていいほどの美しさだった。

僕は思わず見惚れてしまい、入学式をやっている

最中も、ずっと彼女を見ていた。

お蔭で、校長先生の話なんかまったく頭に入らなかった。

それから一年が経ち、僕は中学二年生になった。

中学一年生の時は、他のクラスの彼女を

理由をつけて、度々見に行ったりしていた。

やはり彼女は有名で、彼女を見に来るために

そのクラスに出向く男子生徒も、多かった。

そして、幸運なことに、中学二年生のクラス替えて

彼女と同じクラスになれたのだ。

僕はとても嬉しくなり、心の中で先生達と神様に感謝をした。他のクラスだった彼女が、一緒のクラスにいる。

一緒の空気を吸っている。

そんな妄想が、僕の頭の中を駆け巡った。

それは、同じクラスの僕意外の男子生徒も同じらしく

授業中他の男子を見ていると、皆視線の先は

彼女に集まっていた。

彼女と席は離れていて、何も話をしなかったものの

僕は彼女を見ているだけで、とても幸せな気分になれた。

2 恋愛感情

一学期も終わり、夏休みに入った。

僕は、空に浮かぶ雲を眺めながら、窓辺に座っていた。片手には団扇、肩にはタオルをかけて。

雲はいい。雲を見ていると、色んなことを考えさせられる。例えば、彼女のこととか。

そういえば、彼女はいま何をしているだろう。友達と遊んでいるか。それとも、クーラーの利いた図書館で、静かに本を読んでいるか。

・・・彼女に会いたい。
無意識に、そう思った。

突然猫の鳴き声があった。その声で、ふと我に返った。いつの間にか、彼女のことばかり考えている自分がいた。そんな自分に恥ずかしくなり、何故だか顔が赤くなる。

とりあえず落ち着こうと、窓の外を見た。すると、そこには白い猫がいた。

塀の上ののって、のんびりと欠伸をしている。

動物好きの僕は、窓を開け猫の鳴き声を真似した。

猫の鳴き声の真似だけは、何故かすごくうまいのだ。何回か繰り返していると、猫はこちらを向いた。

その顔は、猫の中では可愛いほうだった。

僕はそこら辺にあったサンダルを履き、裏庭に出た。塀の前に立ち、手を伸ばして猫を呼んだ。

猫は、僕をしばらく見詰めると、立ち上がった。

僕の手の上に乗ってくるかと思ったが、それは違った。

猫は僕を見詰め、にゃあと小さく鳴くと

軽やかに、僕がいる方の反対側へと降りていった。

その白い色と、しなやかな動作は
思わず、彼女を思い出させた。
何を掴めなかった手を、しばらく見詰め
それをそっと降ろした。

夏休みの間中、僕はずっと彼女のことを考えていた。

何をするときも、何故か彼女の顔が頭に浮かぶ。

それを恋だと気付いたのは、夏休みも中盤に入った頃だった。

僕は、家の中でぼーっとして、暇を持て余していた。

それに、暑い。日は容赦なく僕を照らし続ける。

生憎扇風機は故障していて、風を僕に送ってくれる機械は何も無い。

クーラーをつければいいのだが、家には

クーラーは夜にしかつけてはいけない、というルールがある。

今は真昼間。こんな時にクーラーをつけていたら

母親に怒られる。

こんなルールを律儀に守る僕は、正しいのだろうか。

そんなことを思いながら、ふと思いついた場所があった。

クーラーが利いていて、落ち着ける場所。

図書館。そこからさらに浮かぶのは、本を読んでいる彼女の姿。

もしかしたら。そんな期待を抱きながら、僕は図書館へと

向かう準備をした。

僕が近づくと、自動ドアは勝手に開く。

それと同時に、冷やかな風が前から吹いてきた。

それを心地よく感じながら、建物の中へと入ってゆく。

図書館の中は、涼しく静かだ。

人は疎ら。しかし、平日よりはきつと多いだろう。

そんなことを思いながら、僕は棚に並ぶ

たくさんの本の背表紙を見ていた。

基本的に推理小説が好きなので、一冊の推理小説を

手に取り、机へと向かった。

本の表表紙を見ながら机に向かい、ふと顔を上げる。

そこで僕の目は、大きく開かれた。

これほどまでにないくらい、心臓がとても早く脈打っている。

思わず本を落としそうになった。

こんなこと、漫画ではよくあるが　まさか本当に起こるとは。

生唾をぐくりと飲み込んだ。顔が火照っているのが分かる。

僕の視線の先には彼女がいた。

3 隣

ありえないと思っていたことが、本当に起こってしまった。
それは、誰しも経験したことがあると思う。

”ありえない”と思っていたことが、起こってしまったのだから
やっぱり、その時は誰もが驚くんじゃないんだろうか。

そして、僕はいまそれを経験している。

顔を真っ赤にしながら、それを経験している。

彼女は本を読んでいるので、顔を伏せている。
なので、僕の存在には気付いていない。

このまま、一生気がつかなければいいのだが。

僕が他の机に向かおうかどうか迷っていると

彼女は、突然顔を上げた。

その瞬間、僕の鼓動は今まで以上に早くなった。

もう、死んでしまいかもしれない。

そんなことを思うくらい、ドキドキしていた。

彼女と目が合う。緊張とドキドキはピークに達した。

僕と目が合うと、彼女は優しく微笑んだ。

僕もつられて、笑い返す。

すると彼女は、誰も座っていなかった隣のイスの
クッションを叩いた。

ここに来いということだろうか。

僕は緊張しながらも、彼女に近づいた。

「小池賢君・・・だよね・・・？」

僕は驚き、目を丸くした。

彼女が、僕の名前を覚えていてくれた。

僕の顔が、再度赤くなるのが分かった。

「座って」

彼女は隣のイスを後ろに引いて、僕が座れるようにしてくれた。

「あ……ありがとう」

僕は緊張しながらも、彼女の隣に座った。

こんなことが、あつていいのだろうか。

憧れの人が。好きな人が。自分の隣に座っている。

それは夢のようであり、幸せの一時だった。

「学校では話さないけど、私の名前、覚えてくれてる？」

勿論だ。それどころか、同級生の男子で

彼女の名前を知らない者は、いないだろう。

「えっと……白井実那さん……でしょ？」

声が上がった。思わず、口を押さえる。

すると彼女は、クスツと優しく笑った。

「よかった。覚えていてくれて」

笑った顔を見たいのだが、どうにも隣にいと

恥ずかしくて、顔がそっち向かない。

「私のことは、ミナって呼んでくれていいからね」

彼女の優しい声が、すぐ横から聞こえる。

鼓動は早まりっ放しだ。

「えっと……じゃあ……ミナさん……」

言った後に恥ずかしくなる。

こんな僕が、こんな素敵な彼女の名前を

呼んでもいいのだろうか。

「さんはつけなくていいのに」

彼女が笑ったのが分かった。

「じゃあ、私は賢君って呼ぶね」

「えっ!？」

思わず驚き、顔を上げ彼女の方を向く。

彼女は、ずっとこちらを向いていたらしく

僕が彼女の方を見ると、彼女の顔がすぐ近くにあった。

もう少し近づけば、それこそ唇だつて重なるだろう。
それくらい、僕と彼女の距離は近かった。

「え？名前で呼んだら嫌？」

彼女は、少し驚きつつ僕を見る。

目が合う。というよりも、さつきからずっと合っている。

僕が驚きすぎて、視線を外せないだけだった。

そこでやっと我に返り、恥ずかしくなり俯く。

「そ、そんなことないけど・・・」

「よかった。じゃあ、賢君って呼ばせてもらおうね」

彼女がふつと微笑んだ。

もう、そこから先は曖昧な記憶となっていた。

彼女と色々な話をしたことは、覚えている。

でも、話の内容までは覚えていなかった。

緊張しすぎて、恥ずかしすぎて。

彼女があんなに近くにいます。僕の横にいる。

そう考えるだけで、心臓は壊れそうだった。

気付けば彼女は「もう時間がないからいくね」と言い

僕は放心状態で、彼女に手を振っていた。

それが最後で、僕はいつの間にか家に帰っていた。

隣に好きな人がいると、あんな風におかしくなるのか。

それは、僕だけかも知れないけど

少なくとも、好きな人が隣にいる場合は

誰しみが、嬉しく戸惑うだろう。

思い出すと、また顔が赤くなった。

僕は、誰かが見ているわけでもないのに

両手で顔を覆った。

頭の中では、彼女の声が響き渡っていた。

4 驚愕

長かったような、短かったような夏休みも終わりで僕は学校に来ている。

久々に会う友達もいれば、夏休みの部活でたまに会っていた友達もいる。

そして、彼女も勿論いた。

皆が日焼けしているにも関わらず、彼女の肌は透き通るように白かった。

僕は彼女を見て、夏休みに会った白い猫を思い出し窓の外を見た。

高い木々と、広いグラウンド。

生憎くもりがちなので、空は雲で覆いつくされている。

始業式も終わり、今は休み時間。

僕は窓際の自分の席に座り、頬杖をついていた。

横では友達が話をしており、僕はそれをぼーっとしながら聞いている。

僕の横の席に座っているのは翔太で、その前に座っているのが稔だ。

翔太は、しょっちゅうノロケ話をしている。

僕達三人の中で、彼女がいるのは翔太だけだ。

稔は、二年前まで彼女がいたらしいが、その時の彼女に振られてからは

新しい彼女ができていない。

そして、僕は彼女ができたことがない。

なので、二人が昔の彼女の話をしていると話題に入っていけず、ただ黙っているしかないのだ。

今日も、翔太はノロケ話をしていた。

稔は、それに度々突っ込みをいれている。
彼女がいるのが羨ましくないんだろうか。

僕はそう思いながら、翔太の話を聞いていた。
雲は、今日も穏やかに動いている。

少し眠気がしてきた。目を擦り、また空を見上げる。

すると、突然翔太の話が止まった。

稔の声も聞こえない。

翔太のノロケ話が止まるなんて、よっぼどのことがない限りありえない。

僕は不思議に思いながら、翔太達のほうを振り向いた。

「どうし……た……た……た……た……」

僕は目を大きく見開く。驚きすぎて、言葉を失う。

翔太達の話も止まるわけだ。

僕の横には、彼女が立っていた。

彼女は僕と目が合うと、にっこりと微笑んだ。

「賢君、話したいことがあるんだけど……いい？」

教室内が静まった。

5 告白

なんで、彼女は僕に話しかけてきてくれるのだろう。
彼女に話しかけられたとき、僕はそれを無意識に思った。

静まりかえる教室。うちのクラスの皆が
こんなに静かになったのは、初めてではないだろうか。

と言ったら大げさだが、それくらい静かだった。

男子は、皆僕の方を見て啞然としている。

女子は、何？という顔をして、友達と顔を見合わせたりしている。

彼女は今、なんと言った？

驚きすぎて、あんまり覚えていない。

確か そうだ。

『話したいことがあるんだけど』

そういったような気がする。

・・・話したいこと？何だ、それは？

彼女が僕に話すことなんか、何も無いと思うけど。

僕は不思議に思った。

「・・・時間、大丈夫？」

彼女は、静かで凜とした声で言った。

僕は無意識に頷く。

彼女はそれを見ると、ほっとしたように
にっこりと微笑んだ。

「じゃあ、ちよつと来て」

僕は彼女の言うままに立ち上がり

教室を出て行こうとする、彼女の後を追っていった。

その後、教室は大騒ぎだったと思う。

彼女は図書室に入った。

人気の少ない図書室。僕は、後ろでドアを閉めた。

彼女は窓際の机に向かい、椅子に座った。

僕は彼女の向かいに座ると、少し緊張しながら口を開いた。

「・・・話つて、何？」

僕が言うと、彼女はにこりと微笑んだ。

「・・・夏休みに、偶然図書館で会ったじゃない？私達」

僕は少し啞然とした。そんなことを言うために、わざわざ呼び出したのか？

「本を読んでいたら賢君がいたんだもの。少し驚いた」

彼女は笑った。

僕だつて驚いた。だつて、彼女がいたらいいな、と思つて行つた場所に、彼女が本当にいたんだから。

「そこで、私達初めて話をしたよね？」

彼女は、そこでふつと微笑んだ。

「・・・嬉しかったなあ」

僕だつて、嬉しかった。

僕はそれを口に出そうとしたとき、ふとした疑問に気がついた。

今、彼女は僕と話せて嬉しいと言つた？

驚いて顔を上げたら、彼女と目が合った。

彼女は少し頬を赤くして、はにかんだ。

初めて見るその表情に、僕はまた惚れてしまったかもしれない。

「・・・それつて・・・どういふこと・・・？」

相変わらず頭の整理がつかないまま、僕は聞いた。

彼女はますます頬を赤くし、それから黙ってしまった。

僕はどうすることもできずに、ただ彼女が何か言うのを待っていた。それから少し経ち、彼女は決心したように口を開いた。

「・・・賢君が、好きです」

え？

思考回路がストップしてしまった。

何も考えられない。口はポカンと開いたままだ。
彼女は顔を赤くし、俯いた。

まだ全て整理できないが、僕が言うことはただ一つ。

「・・・僕も・・・好きです・・・」

消え入りそうなその声を、彼女はしっかりと聞いていた。

顔を上げた彼女の顔は、ほんのり赤くて、綺麗だった。

彼女はだんだんと、笑顔になっていった。

「よかった・・・!!」

彼女は、嬉しそうにそう言った。

「私、告白するのって初めてで。だから・・・

失敗したらどうしようって・・・心配だったの」

嬉しそうに語る彼女を見て、僕もつられて笑った。

そして、予鈴がなった。

「行こっか」

彼女は微笑むと、立ち上がった。

そして、僕達は二人で教室へと帰っていった。

憧れの彼女と、付き合うことができるなんて。
それだけで胸がいっぱいだった。

幸せすぎて、何も考えることができなかった。

幸せは、一生続くことはない。

そんなこと、人一倍分かっていたくせに。

それでも、このまま幸せが続けばいいのに。

そう、願ってしまった。

6 ゆっくりと

教室は、相変わらず騒がしかった。

僕が教室に入ると、男子が皆集まってきた

後は質問攻めだった。

そして、僕が彼女に告白された、ということと言つと

男子は皆絶句して、今度は彼女が質問攻めになった。

それが少しおかしくて、思わず笑ってしまった。

教室の中では、二人の男女が質問をクラスの男子

全員から受けているなか、女子達はそれを黙って見ていた。

やがて、一人の女子が口を開く。

「ねえ……。前から思ってたんだけどさ」

最初に口を開いたのは、クラスでもリーダー的存在に位置する女子だった。

「実那って最近調子乗ってない？」

「はい。それ、うちも思ってた」

クラスの中心にいるグループの一人が、また口を開く。

「だよねー！だって、前の彼氏があの子に恋したから

私振られたんだよお！？なんか悔しくない？」

「うちもその理由で彼氏に振られたあー！！」

そして、次々と便乗して女子達は口を開く。

その内容は、全て実那に対する妬みのようなものだった。

「調子乗り過ぎでしょ。実那」

その言葉に、女子達はだよねーと同感の意を表す。

「……。いじめちゃう？」

リーダー的存在の女子が、薄笑いを浮かべながら言った。

「そーする？全員でハブっちゃうとか？」

「さーんせーい」

「っーかそれよりもお・・・」

実那をいじめるという計画は、どんどんと膨らんでいった。その話題で女子達は盛り上がり、教室内はさらに騒がしくなった。

それを実那は、静かに横目で見ていた。

なんてことだろう。

彼女と一緒に帰ることになってしまった。

今、僕は彼女と一緒に並んで歩いている。

周りには誰もいない。

人に見られるのが嫌で、人気のない道を選んだからだ。

しかし、それが仇となってしまった。

細くて車も通れない道なので、何の音もない。

せめてもの救いは、鳥のさえずりくらいだ。

僕は、心の中でどうしようを繰り返しながら

彼女のことを、横目で見た。

彼女は少し俯きながら、歩いている。

何か話をしなければ。

そう思い、僕は決心して口を開いた。

「・・・えつと・・・」

「・・・何？」

彼女が笑顔でこちらを見てくる。

「えつと・・・」

しまった。話す内容を決めてない。

どうしよう。何か話さなければ。

焦った僕は、とにかく何か喋ろうと試みた。

「えつと・・・手、繋いでもいい？」

彼女の頬が赤くなる。

「・・・え？」

と言ったのは彼女ではなく、紛れもない僕だった。
今・・・何言った？自分。

手、繋いでもいいって・・・。

自分で言ったことに驚き、慌てて説明を加える。

「いや！別に嫌だったらいいんだけど、っていつか間違いといつか・・・」

しどろもどろになりながら、とにかく説明しようとする。

ふと、彼女を見ると、顔が赤くなっていた。

僕だってそうだろう。というか、自分で言ったことに照れてどうするんだ。

「いやっ、その・・・だから・・・えっと・・・」

とにかく間違いだと言う事を、彼女に伝えようとした。
すると、彼女はゆっくりと顔を上げ、笑顔で言った。

「・・・いいよ」

「・・・え？」

彼女の言葉の意味が分からなくて、一瞬固まる。

「私も、賢君と手・・・繋ぎたい・・・から」

彼女は顔を赤くし、はにかんだ。

その言葉に、僕はさらに照れる。

「えっと・・・じゃあ・・・繋ごっか・・・」

僕の手と彼女の手が重なる。

そして、手を繋いだまま再び歩き出す。

とにかく、結果はよかったのか・・・？

僕は、耳まで真っ赤になりながら思う。

彼女を見ると、彼女も相変わらず顔が赤かった。

それに、何か楽しそうだった。

その顔を見ていたら、ずっと見詰めていたくなるので目を逸らす。
視線を上に移し、空を見詰めた。

・・・まあ、恥ずかしいのは変わりないけど・・・。

僕は心の中で静かに笑った。
空は、相変わらずの天気だった。

7 笑顔の裏側

そのまま彼女を家まで送り、僕は家路についていた。彼女の家に着くまで、僕等はずっと手を繋いでいた。目が合ったたびに微笑む彼女につられて

僕も顔を赤くして笑った。

会話は少なかつたけれど、お互い満足気だった。

彼女との会話を思い出しながら歩く。

自然に口の端が上がってしまう。

本当に幸せだと、心からそう思った。

翌日、学校に登校した僕は

急いで教室へと入った。

時計を見ると、もう少しで遅刻するところだった。

危ないところだった。思わずほっと息を吐く。

彼女の方を見ると、目が合った。

「おはよう」

笑顔で言う。すると、彼女も笑顔で

おはよう、と返してくれた。

いつもと変わらぬ笑顔。

しかし、それはどこか悲しげだった。

僕は疑問に思い、彼女に聞いてみようと思った。

しかし、その瞬間チャイムがなる。

まだ支度を終えてない僕は、慌てて席に戻った。

少々心懸かりだが、見間違いだらうと

自分で納得し、支度を急いだ。

あつという間に午前の授業は終わり
昼休みになる。

僕は彼女と一緒に、屋上で弁当を食べていた。
最初の頃に比べると、段々と会話も増えてきて
さらに楽しくなってきたところだった。

会話は充実している。

しかし、彼女が見せる笑顔の回数は
確実に減っていた。

笑顔には、明らかに不安と悲しさが滲み出ていた。
思わず気になり、聞いてみる。

「・・・ねえ」

「何？」

彼女は笑顔でこちらを向く。

「・・・何かあったの？」

一瞬の沈黙が生まれた。

野球部が昼練習をしていた。

大きな掛け声が聞こえる。

グラウンドは騒がしかった。

「何で？別に、何ともないよ」

笑顔を見せる彼女。

しかし、その笑顔には明らかに不安と悲しみが滲み出ていた。

「そう・・・」

何ともなかったようには見えない様子だけれど

これ以上詮索するのは止めにした。

たぶん、これ以上聞いても彼女は

同じように笑顔を振りまくだけだ。

痛々しげな笑顔を見るよりは、彼女を元気づけられる

ことを言っただけのほうがいいと思った。

僕は何かないかと考えた。

すると、彼女が僕の手を握ってきた。

僕は驚き、彼女の顔を見る。

「ねえ。・・・賢けんって呼んでいい？」

その綺麗な眼差しが、僕の鼓動を早くする。

「うん・・・いいよ」

僕がそう答えると、彼女は微笑んだ。

「じゃあ、僕も実那みねって呼ばなきゃね」

僕が言うと、彼女は少し驚き

それからにはかんだ。

「ちよつと照れるね」

頬を赤くして笑う、彼女の笑顔は

先ほどとは違い、今まで通りの

明るい笑顔だった。

恥ずかしく思いながらも、僕はほっとした。

その時、チャイムが響いた。

僕と彼女は、一緒に教室へと戻っていった。

放課後、賢と別々に帰ることになった実那は

一人で靴箱に立っていた。

靴を取り出す。

すると、靴の中に紙くずがたくさん詰め込まれていた。

「・・・・・・・・」

靴を一旦置き、紙くずを一つ取り出す。

それを広げる。文字が現れた。

実那は目を閉じ、息を吐く。

そこには、悪口や実那を批判する言葉が書かれていた。

ゆっくりと目を開け、紙を見る実那。

その表情は、とても悲しげだった。

紙くずを取り出し、清掃用に使われる

ごみ箱に紙を入れる。

靴を履き、学校を出る。

嗚咽おえつを漏らさないよう

強く噛み締める唇。

その後姿は、悲しみに満ちていた。

いつしか雨も降ってきていた。

7 笑顔の裏側（後書き）

かなり更新遅れて申し訳ありません（汗
まさか85日以上も更新していなかったとは・・・

これを読んでくださっている方

すいませんでしたorz

今度からはあまり間を空けないよう

努力します。はい。

ネット小説ランキングに参加しています。

ここ「<http://nnr.netnovel.org/>」のT

OPから

「無能な僕と偽装な彼女」と検索し

気に入っていただけならば、投票ボタンを

押してやって下さいまし（誰

8 二人で

何かおかしいと、思っていた。

最近、クラスの女子に話しかけても冷たい反応をされる。

移動教室にしたって、今までは一緒に行ってくれる人がいたのに

こないだから突然、避けられるようになった。

休み時間には、女子達皆が教室でひと塊になってこちらを見て、何かひそひそと話をしている。

そういう反応をされる度に、実那の心には傷と悲しみが増えていった。

唯一安らぐことができたのは、賢の隣だった。

賢のくつたくのない笑顔を見るたびに心の傷は、幾分か癒されていった。

しかし、癒されて消えてゆく傷よりも

悲痛でつく傷のほうが多かった。

クラス内での無視、それだけならまだしも今度は靴箱にごみ。

そうともなると、実那は実感せざるを得なかった。

ああ、私はいじめられているのだ、と。

雨の降る中、傘もささずに歩く道。

灰色のコンクリートは黒色に変わりなんともどんよりとしていた。

ため息をつく。

さつきから出るのは、そればかりだった。

ああ、せめてこんなとき賢の笑顔が隣にあれば。

そんな、他人に甘えようとする自分に

気付いたときには、自分が嫌いになっていた。

また、ため息をつく。

雨のせいか、ますます実那の心は沈んでいった。

そんな時、ポケットに入れた携帯がなる。

軽快なリズム。それを聞き、実那の心は少し晴れた。

それは、賢からの着信だった。

メールを開く。そこには

『最近元気ないよね？どうかしたの？』

という文章が、ゴシツク体で踊っていた。

実那は、その文章を読んで

思わず賢の心配そうな顔を思い浮かべた。

顔がほころぶ。

実那の心は、温かくなっていった。

僕は家に帰ってから、ずっと彼女のことを考えていた。

今日は家の用事で早く帰ったので

彼女と一緒に帰れなかった。

元気がない理由を、今日こそは帰りに聞こうと思ってたのに。

ため息をつく。

外を見ると、雨が降っていた。

考えれば考えるほど、心配になる。

僕は机の上にある携帯を見詰めた。

もう、聞くしかない。

僕は携帯を手に取り、メール作成を選んだ。

文章を作っては、何回もやり直した。

五分くらいそれを繰り返して、やっとのことで文章を作成する。

ボタンを押して、彼女に送信する。

こんなに時間を掛けたメールは初めてだ。

僕はふう、と息をはいて、仰向けに寝転んだ。

それからしばらくして、彼女から返事が来た。

着信音が鳴ったとき、漫画みたいに

ドクン、と心臓がなった。

携帯を開く。だんだん鼓動が早くなってきた。

なんでこんなことで、ドキドキしてるんだ。

そう思ったけど、鼓動は早くなるばかりだった。

メールを開く。そこには

『何でもないよ。大丈夫！心配しないでね』

という文章があった。

絵文字が使われていて、そのメールからは

元気がない様子なんか、微塵も感じれなかった。

それに、『心配しないでね』という文のあとに

ハートの絵文字がついている。

それだけでドキドキしてしまう僕は、なんなのだろう。

自分で突っ込み、自分で落ち込んで、自己嫌悪。

彼女と会ってからは、色んな意味で

ドキドキしっぱなしだ。

「はぁー・・・」

大きく息を吐くと、彼女にメールの返事を送って

ベッドに寝転んだ。

今日は疲れた。

心の奥の不安は、まだ完全には拭えない。

でも、今は彼女を信じるしかなかった。

9 心配

翌日、遅刻ぎりぎりです教室に着いた僕は愕然とした。

そこにはありえない状況が広がっていたからだ。

女子が皆、彼女を避けるように座っている。

数人が集まって話しているところは

話をしながらも、彼女のほうを睨んでいた。

男子はどうすればいいか困ったような顔で

皆座っている。

僕は驚きながらも、自分の席につく。

「おいおいおいおい」

翔太が急いでとんでくる。

「どうなってるんだよ、これ」

何がどうなっているか分からない。

そんな顔で問いかけてくる。

「僕だって知らないよ。教室入ったらこんな風に……」

困惑して答える。

「どうやらはぶられているようだね」

無表情で稔もやってくる。

「それかいじめられているか」

その言葉に僕は反論する。

「なんでだよ。実那がいじめられる理由なんてどこにもない」

「ん……」

稔は考えるような顔をしながら唸る。

「まあ何かしら理由はあるんだよ。たぶん理不尽なものだけどね」

「あれじゃね。あいつ調子乗ってるよな、とか

そういう理由じゃないの？」

翔太と稔は、顔を見合わせてだよなあ、とか言っている。

他の男子達も、僕のほうを横目で見ている。
その男子のどの表情にも、困惑の色が混ざっていた。
僕がどうしたらいいか悩んでいると
チャイムが鳴った。

翔太と稔は頑張れよ、と僕に言い残し
自分の席に戻っていった。

授業中、僕は外ばかり見ていた。
相変わらず雨ばかり降っている。
ため息をつく。

彼女はいじめられているのか？
信じたくないが、あれはどうみても
はぶられているように見えた。

もしいじめられているとしたら 僕はどうしたらいいのだろう。

額に手をあて、ため息をつく。
首を回し彼女のほうを見る。

その後姿からは悲しみが滲み出していた。
授業が終わったら、彼女に聞こうか。
でも、面と向かって聞けない。

どうしたらいいんだろう。ただ悩むしかなかった。

次の授業は移動教室ということだ

僕は翔太と稔と一緒に廊下を歩いていた。

「なあ。お前どうするんだよ」

翔太が口を開く。

「だってあれはどう見てもはぶられてるぜ？」

「うん。僕もそう思う」

稔も便乗する。

「もしかしたら、陰でもっとひどいことを

されてるかも知れないし・・・」

二人の言葉に、僕はまたため息をつく。

「でも、どうしたらいいか分かんないんだよ。」

彼女に直接聞くこともできないし」

僕がそういうと、二人はまた悩み始めた。

「んー・・・とにかく、白井さんがヘルプサインを出してきたら助けてあげればいいんじゃない？」

「そうそう。そうすれば白井も賢のこと惚れ直すかもしれないぜ？」

二人は必死に僕にアドバイスをくれたり

元気づけようとしてくれたりするが

僕の心配は一向に消えない。

「まあ俺もそういうことあったからなあ。」

あれは俺が中二のとき・・・」

「うわあまた始まったよ。話さなくていいから」

「なんでだよ！」

二人が騒がしく歩いていると、クラスの同級生たちが僕に近づいてきた。

「賢。頑張れよ、白井さんのために」

「そうだぞ。白井さんが可愛いそうだよ」

「俺達もなるべく努力するからさ、必ず救ってやれよ」

やはり、皆彼女に好意をよせているのだろう。

皆心配そうな顔をしていた。

「うん。頑張るよ」

僕はため息を飲み込み、無理矢理笑顔をつくった。

10 ため息

その日の昼休み。

僕は彼女と一緒にいつものように

屋上で、昼ごはんを食べていた。

空は灰色の雲でうめつくされていた。

夏が終わり、木は秋の衣装を

身に纏おうとしているのに

最近の天気は梅雨の如く、雨ばかりだった。

今にも雨が降りそうな天気の中

僕と彼女は並んで座っていた。

弁当を食べている最中も

僕は彼女の顔色を伺うばかりだった。

何かあったのか、直接聞こうとも思ったが

勇気が出なかった。

弁当も食べ終わり、僕は弁当を片付け始めた。

片付けながら、ふと横目で彼女を見る。

やはり彼女の顔には元気がなかった。

そういう彼女の顔を見るたびに

心が締め付けられ、心配になる。

やはり、はぶられているのは確かなんだろう。

実際、自分の目でも見た。

・・・やっぱり直接聞いたほうがいい。

決心して、僕は聞くことにした。

「・・・ねえ」

口を開く。

「何？」

彼女は笑顔をつくる。

でも、それは無理矢理つくったようにしか

思えなかった。

「実那さ、最近なんか悩んでるよね？」

その言葉を言うだけでも、鼓動が早まる。

「え？別に悩んでなんかないよ」

「でも、最近ため息ばかりついてるよね？」

彼女は、少し顔を曇らせる。

「・・・うん。この頃寝不足で、疲れてるの」

その笑顔に、僕はまた心が苦しくなる。

「・・・そう・・・なんだ。体調崩さないようにね」

「うん。ありがとう」

なんで聞かなかったんだ。

”本当のこと言ってるよ”って。

そんな簡単な言葉、何で言えなかった。

勇気を出せない自分が嫌になる。

予鈴がなった。

僕達は立ち上がり、教室へと向かった。

11 沈痛

5時間目の授業は数学だった。

僕はうわの空で、まともに先生の話なんか聞いていなかった。

考えるのは、彼女のことだけ。

心配で、不安で、心細くて、どうしたらいいか分からなくて。
何も、できなくて。

色んな感情が心の中に渦巻いて

一つになり、”悲しみ”になる。

どうしようもできない悲しみは

心の器を溢れ^{あふ}出て、今度は目から

溢れようとする。

はあ、とため息をついた。

彼女を見る。

横顔の表情は暗くて、僕の心を
きつく締めた。

ふと見たら、彼女の後ろの席の女子が

周りの女子達と笑いあっている。

その女子は、女子達の中でも

リーダー的存在の、瑠璃だった。

ああ、あいつらはあんなに楽しそうにしてるのに。

それを思うと、また胸が締め付けられた。

瑠璃は女子達と笑いあうと

彼女の肩に、重いきりシャーペンをさした。

「痛っ!？」

彼女は顔を歪ませる。

「あ、ごめん。ぼーっとしてたらささっちゃった」
瑠璃が笑いながら言う

周りにいた女子も、くすくすと笑った。
彼女は悲しそうな顔をして、俯いた。
あれは、絶対にわざとだ。
思い切りシャーペンをさしていた。
段々と腹が立ってきた。
休み時間になったら、絶対に言つてやる。
僕は笑っている瑠璃を見ながら、決心した。

授業が終わり、休み時間になった。
彼女はすぐ教室を出て、どこかへ行ってしまった。
それを見て、ますます瑠璃に対して
腹が立った。

「おい」

瑠璃のところへ行く。

「何？」

「さっき実那の肩にシャーペンさしたの、わざとだろ」
瑠璃はそれを聞き、眉間に皺をよせる。

「はあ？わざとじゃないし。何言つてんの」

「思い切りさしてたの見たんだぞ。わざとしか思えないだろ」

「そーだぞー。俺も見てたけど、そう思った」

僕が反論すると、様子を見てた翔太が入ってきた。

「何言つてんのあんた達」

「瑠璃がわざとじゃないって言つてんだから

そつに決まってるじゃん」

すると、瑠璃達といつも一緒にいる女子達
が瑠璃の味方をする。

「あれのどこがわざとじゃないんだよ」

「だから違うつつてんだろ！」

だんだん瑠璃の口調が変わってきた。

「つーかさ、お前等白井さんいじめてんだろ？」
稔が女子達に向かっていった。

「は？何いきなり？」

瑠璃は、はっと鼻で笑った。

その時、彼女が教室へ戻ってきた。

それを見た瑠璃は、彼女の元へ駆け寄り

肩を組む。

「うち等、超仲いいんだけどー」

それを見た周りの女子達も、瑠璃と同じように

彼女の周りに集まる。

彼女は何が何だか分からず、ただ驚いている。

「ほら。これで誤解解けた？」

「・・・そのうちばれるからな」

「何のことー？」

瑠璃は笑う。

そして、笑顔で言う。

「ねえ、皆でトイレ行こうよー。ね、実那も一緒に」

「え・・・」

彼女は戸惑いながら、瑠璃達に強引に連れて行かれた。

翔太は僕の肩に腕をまわす。

「賢ー。お前が怒るなんて珍しいな。

ま、あれじゃしょうがねえか」

「・・・あいつ等、調子に乗りやがって」

稔は、はあと腕を組んで息を吐いた。

「とにかく、様子見なきゃね」

「・・・」

僕は瑠璃達が出て行った、教室のドアを睨んだ。

実那は、瑠璃達に強引に

トイレに連れ込まれた。

そして、実那を壁に突き飛ばす。

「っ……」

実那は思い切り突き飛ばされ、背中をぶつける。

瑠璃は実那の顔の横に、両手をつく。

「何だよお前の彼氏。調子のってんじゃねえの？」

瑠璃は実那を睨みながら言う。

「そんなこと……」

思わず、視線を逸らす。

「あれかなりムカついたんだけど」

実那は横を向いたまま、口を開かない。

「お前調子乗ってんじゃねえぞ？」

きつい視線に、実那は思わず

「ごめんなさい……」

と言ってしまった。

「次あんなことあったら、今度こそキレルから」

瑠璃は手を壁から離し、実那をきつく睨む。

「あなたの彼氏によく言っときな」

そして、瑠璃達はトイレから出て行った。

一人取り残された実那の頬には

涙が伝っていた。

12 衝動

6時間目が始まったというのに、彼女は戻ってこなかった。
瑠璃達の所為だ。

きっと、瑠璃達が何かやったのだろう。

僕は悔しくなり、瑠璃を睨んだ。

瑠璃はと言えば、授業中だというのに

周りの女子達と一緒に、遊んで笑いあっている。

彼女はあんなに落ち込んで、悲しんでいるというのに。

本当に、どうしたらいいのだろう。

僕に、何ができるのだろう。

開きかけた口から出るのは

答えではなく、ため息ばかり。

僕は主が存在しない椅子と机を見て、目を伏せた。

放課後になり、皆が部活に向かう頃。

僕は彼女が帰ってくるのを、教室で待っていた。

教室の中には、自分一人。

廊下にも、他の教室にも誰もいない。

たぶん、この階にいるのは僕だけだろう。

オレンジ色の優しい光が、教室を包む。

僕は立ち上がり、窓枠に腕をのせて

外を眺めた。

夕日が街に降り注ぎ、柔らかな印象を与えている。

そんな景色を見ても、僕の心は晴れず

ただ、重く沈んでいった。

その時、背後で音がした。

振り向くと、そこには彼女がいた。

「……実那」

彼女は僕がいることに驚いたらしく
一瞬ビツクリしたような顔をして
それから、ゆっくり微笑んだ。

その微笑が、ひどく悲しいものに
見えたのは、夕日の所為だろうか。

「賢、なんでいるの？びつくりしたよ」

彼女はそういうと、自分の席につき
鞆の中に荷物をつめ始めた。

「今までどこにいたの？」

それを聞くのに、不自然なほど緊張した。

小さく開けた口から発せられた言葉は
少し震えていた。

「ちよつと気分悪くなっちゃったから、保健室で寝てたの」
声の震えに、彼女は気がつかなかったらしい。

作業が終わったらしく、一息を吐くと
鞆を持ち立ち上がった。

「もしかして・・・心配して、待っててくれた？」

「うん。まあね・・・」

「・・・ありがとう。嬉しい」

彼女は照れたように微笑んだ。

それは、久しぶりに見る笑顔だった。

作り笑いでもなければ、同情でもない。

彼女の、本当の笑顔。

それを見たとき、心の何かがはずれるような気がした。
作り笑いなんかしないで欲しい。

悲しい顔なんか、もううんざりだ。

素直に、笑ってほしい。

無意識のうちに、僕の足は動いていた。

何がそうさせたか分からない。

ただ、衝動に駆られて

僕は彼女のもとへと向かっていく。

彼女と僕の距離が、さっきよりも

ぐんと近づいた時。

僕は彼女の細い肩を引き寄せて、抱いた。

彼女の髪から漂う匂いは

悲しいほどに甘かった。

13 喧嘩

「な、何・・・？」

耳元から聞こえる

彼女のひどく驚いた声。

「・・・ごめん。よく分からないけど・・・」

僕は彼女を強く抱きしめた。

「もう少し、このままでいたい・・・」

震えた声に、何かいつもと違う雰囲気を感じたのか。

「うん・・・」

彼女は静かに頷いた。

そして、そっと僕の背中に細い腕を回してくれた。

優しい力で、僕を包んでくれる彼女。

肌に伝わる体温の温かさに

優しい気持ちになった。

息を吐く。決心をして、彼女と離れる。

肩を掴んでいた手を、ゆっくりと下に下ろした。

「・・・聞きたいこと、あるんだけど」

「・・・何？」

静まりかえった教室。

遠くのグラウンドからは、練習をしている

野球部の声が聞こえる。

ゆっくりと息を吸う。

口を薄く開いて、僕は言った。

「・・・実那、瑠璃達にいじめられてない・・・？」

妙な緊張感が漂い、僕は生唾を飲む。

彼女を見ると、一瞬悲しそうな顔をして

それから微笑んだ。

「ううん。そんなことないよ」

「嘘つくなよ」

思わず強い口調になる。

「見たよ。授業中、瑠璃がわざと実那の肩にシャーペンをさしているところ……」

彼女の表情が曇った。

「それに、皆に……はぶられてるところも胸が締め付けられる。」

顔をあげて、彼女を見た。

「ねえ。本当のこと言っつてよ……」

彼女は俯いている。

その体は、微かに震えていた。

「……実那……」

少し心配になり、彼女の腕を掴もうとしたとき。

彼女は勢いよく顔をあげ、僕を見た。

僕は驚き、そのままの姿勢で固まる。

「……大丈夫だから……心配しなくていいよ」
声が震えている。

表情も、必死に笑顔を保とうとしているが

涙目になり、今にも泣き崩れそうな顔になっている。

「なんで隠すの？」

「隠してなんかないよ」

「本当のこと言っつてよ!!」
強い口調になる。

ここで聞かなければ、後で絶対に後悔する。

「だから、いじめられてなんかかないよ。隠してなんかもないし」
彼女も、少し強い口調で喋る。

涙は今にも零れ落ちそうだった。

「……お願いだから、本当のこと言っつてよ。
なんで隠すの……」

「隠してなんかない!!」

僕の言葉の最中、彼女は大声で言った。

初めて聞く声に驚き目を見開く。

彼女の顔には、涙が伝っていた。

「……余計な心配しなくていいよ」

震える声で彼女は言う。

その言葉には、怒りが混じっていた。

「でも……」

「もう、いいよ」

「だっていじめられてるんだろ？」

「いじめられてなんかない！！」

声を荒げる彼女。

初めて見る彼女の姿に

僕は圧倒されるだけだった。

後ろを向き、彼女は教室から出ようと

扉のほうへ走って向かう。

「待ってよ！」

急いで追いかけて、手を掴む。

「離して！！」

彼女は僕の手を振り払い、涙が溢れる目で僕を見た。

「……心配いらないから」

「なんで隠すんだよ！？」

隠し通そうとする彼女に苛立ち

思わず声を張り上げる。

「もういい！！」

大きな声をあげ、僕を睨む。

「……もう関わらないで」

そっぴい残し、彼女は鞆を手に

教室から出て行った。

廊下を走る、彼女の足音が聞こえる。

それは段々と遠ざかり、再び教室に静寂が戻ってきた。

僕は、何が起こったのか分からず
ただ立ち尽くすばかりだった。

” もう関わらないで ”

彼女が言い残していった言葉が
耳の奥で響いていた。

14 悲しみ

オレンジ色の光が差し込む廊下を
全力で走る。

誰も追ってきていないことは
分かっている。

それでも、全力で走りたかった。
途中で止まってもよかった。

でも、走るのをやめたら
いけないような気がした。

階段を駆け下りる。

靴箱まできたとき、足は自然と
止まっていた。

呼吸を整える。そして、気がついた。
気付いたときには、もう遅かった。

「……はぁ……」

ため息にも似た息をつき、実那はしゃがみ込む。
賢に怒ってしまったことを、実那は後悔していた。

心配してくれているのに、何故怒ってしまったのだろう。
心の中には、後悔と悲しみだけが
渦巻いていた。

これは喧嘩というものだろうか？
彼女は怒ってでていってしまった。

僕は、何も考えられなくて
ただその場に立っていた。

しかし、心の中は冷静だった。
それと同じに、悲しみに溢れていた。

たぶん、彼女が怒ってしまったのは
自分がいじめられていると
認めたくないから。

その気持ちは、よく分かる。

だけど・・・

目を伏せる。

グラウンドからは、野球部の
声が騒がしく聞こえる。

僕の前くらい、素直でいてほしかった・・・。

それは、贅沢な悩みだろうか？

それでも、ちゃんと話して欲しかった。

お互い、想っている同士なんだから。

目を開け、窓の外を見る。

部活の練習風景の中、一人校門に

向かっていく生徒の姿を見つけた。

美しい髪を靡^{なび}かせて歩く

それは彼女だった。

その後姿は、悲しみに包まれていた。

僕は改めて思った。

彼女は、とても美しい。

そして、とても悲しいと。

15 悩み（前書き）

季節がずれてしまうので

2話連続で投稿。

なるべく季節はあわせたいので（藁
読んでくださる方は

14話からお読みください）（

15 悩み

気付けば季節は冬になっていた。

今年の秋は、足早に

過ぎ去っていつてしまった。

授業中、僕はそんなことを思いながら
外を眺めていた。

葉が全て散り、枝だけに

なつた木々達は

とても寂しそうだった。

しかし、それは僕の心かもしれない。

彼女を見る。

あれから何日たっただろう。

彼女とは、全く話していない。

お互い怒っているわけではないのだが
なかなかきっかけが掴めなくて

話せないでいる。

僕と彼女は、そんな感じだった。

彼女は、今もいじめられている。

クラス中の女子達から

無視されていた。

もしかしたら、陰でもっと

酷いことをやっているかもしれない。

どうしたらいいのだろう。

それだけが、僕の頭の中を

駆け巡っていた。

「小池」

先生が、自分の名前を呼ぶ。

「はい」

短く返事をして、立ち上がり
教卓に近づいた。

そういえば、今はテスト返しを
していたんだった。

テストを受け取り、席に戻る途中に
彼女のほうを見る。

すると、彼女も僕のほうを

見ていたらしく

目があつてしまった。

気まづくなり、急いで目を逸らす。

自分の席に戻り、また彼女を見る。

彼女は俯き、じつとしていた。

か細い背中が、気のせいか

もつと小さく見えた。

悲しくなり、僕は目を外にやる。

すぐ近くの木。

その枝の先端に、かろうじて

一枚残った葉がついていた。

しかし、それはすぐに

風にとばされて

どこかへと行ってしまった。

・・・本当に、悩むことばかりだ。

どうしたらいいのだろう。

僕は目を伏せ、ため息をついた。

冬の風が、容赦なく吹き付けてくる。
僕は一人家へと向かう道を
歩いていた。

　　やっぱり、謝らなければ。
自分から動かなきゃ
何も変わらない。
そう心に決めた僕は
俯いていた顔をあげ、前を向いた。
冷たい追い風が吹く中
歩く速度を速め、家へと急いだ。

家に帰り、ただいま、も言わず
僕は二階の自分の部屋へと直行した。
すぐに鞆を置いて、机の上にあった
携帯を手にも、ベッドに座る。
息を落ち着かせてから
電話をかける。

電話の相手は、もちろん彼女だ。
呼び出し音が鳴る。
一定に繰り返すその音を聞きながら
僕は心中不安だった。
何しろ、喧嘩したばかりだ。
彼女は怒っていないのは分かるが・・・
もしかしたら電話に
出てくれないかもしれない。
僕は不安に思いながら

呼び出し音を聞いていた。

お願いだ、出てくれ

そう思った瞬間、声が聞こえた。

「もしもし……」

彼女の声だった。

「あ、もしもし……」

一気に緊張してしまう。

「あのさ……」

心を落ち着かせ、計画していたことを

彼女に話す。

「……うん……ありがとう。」

じゃあ、待ってるね」

電話を切り、携帯を置く。

ふーっ、と大きく安堵の息を吐いた。

でも、これからが重要だ。

そう自分に言い聞かせ、携帯を手に取り

立ち上がる。

上着を着て、家を出て

自転車に乗った。

外の風は、先ほどよりも冷たくなっていた。

僕は上着の前をよせ、寒さに耐えながら

自転車をこいだ。

僕は電話で、彼女を近くの公園へ

呼び出した。

電話で誤ればよかったのだろうけど

やっぱり直接会って話したかったからだ。

きっと、彼女もこれから僕が

何を話すのかを、分かっている。

僕の為にも、彼女の為にも。

思っていることを、全て伝えなければ。
僕は、公園に向かう中

心の中で自分の気持ちを整理していた。
数分立つと、木々に囲まれた
公園が見えた。

決して大きいわけではないが
昼には、散歩をしている人や
親子連れなどで賑わっていて
近所の住民には、親しまれている。

僕は公園につくと、自転車から降りる。
指定したベンチの方を見遣ると
まだ彼女は来ていなかった。

約束の時間まで、まだ十分ある。
僕は自転車を引きながら
ベンチへと近づいた。

近くに自転車を止め、ベンチに座る。
公園を見渡すと、親子連れが二組いて
ここから離れた隅のベンチには
犬を連れなおじいさんが
座っていた。

やはり夕暮れ時とあって
公園に来てる人は少ない。
僕は冷たい風に負けないように
身を縮こませ、彼女を待っていた。
数分して、ふと公園の
出入り口を見る。

すると、彼女がちょうど公園に
入ってくるところだった。

緊張が一気に高まる。
深呼吸して、自分を落ち着かせる。

立ち上がり、彼女に小さく手を振る。

すると、彼女もこちらに気付いたらしく小さく手を振ってくれた。

僕に気付いた彼女は

駆け足で、こちらへ寄ってきた。

「ごめんね。待った？」

彼女は申し訳なさそうに

僕の顔を見上げる。

「ううん、全然」

僕は笑顔で答え、彼女と一緒にベンチに座った。

16 公園（後書き）

皆さん明けましておめでとございます。

ご挨拶、更新遅れてしまい

申し訳ありません；

さて、この小説も連載が始まってから

早くも一年が過ぎてしまいました。

嬉しい限りでございます（´、*）

今の時点で累計9,863アクセス突破いたしましたw

他の方に比べたらとても少ないかも

しれませんが、私にとっては

とてもすごいことなんです（藁

もうすぐで10000アクセス・・・。

まだまだ未熟かも知れませんが

よかったらこれからも「無能な」を

読んでやってくださいw

それでは、今後もよろしくお願いいたします。

水瀬律那

08/03/06 誤字直しました。知らせてくれた方ありがとうございます

ございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5251b/>

無能な僕と偽装な彼女

2010年12月31日04時33分発行